

「記憶の場」の形成と「歴史的環境」との関わりについて：勝淵神社の柴田勝家兜埋納伝説を事例に

著者	馬場 憲一
出版者	法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会
雑誌名	現代福祉研究
巻	15
ページ	153-170
発行年	2015-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/9881

<論 文>

「記憶の場」の形成と「歴史的環境」との関わりについて ー勝淵神社の柴田勝家兜埋納伝説を事例にー

馬 場 憲 一

【抄録】 近年、「集合的（集团的）記憶」の研究が注目されている。しかしその集合的記憶を想起させる「記憶の場」について、地域レベルで行われてきている伝承事象（＝「伝説」）の形成過程や「歴史的環境」との関わりで論じた研究はない。そのため、都市部に位置する東京都三鷹市新川地区の勝淵神社に伝わる「柴田勝家兜埋納伝説」とその境域を事例に、地域社会の中で「記憶」の源泉となっていた「伝説」の形成過程や、現在、「記憶の場」として存在している場（サイト）が「歴史的環境」を形成している現状を考察した。その結果、勝淵神社には現存する記録史料の分析から柴田勝家の兜祭祀や兜埋納の「伝説」が江戸時代中期以降に成立し伝承されてきている状況や、「場の歴史性」とそこを「構成するモノ」によって勝淵神社境域が「歴史的環境」を形成している実態を明らかにし、「記憶の場」の形成・継承にあたっては「歴史的環境」の存在がそのイメージ化に大きな役割を果たしていることを指摘した。

【キーワード】 記憶の場 伝説 歴史的環境 勝淵神社 柴田勝家兜埋納

1. はじめに

近年、過去の事件・事象に関し後世の人々がそれらをどのように記憶し認識していったのかという観点から「集合的（集团的）記憶」の研究が注目されている¹。その集合的記憶を想起させる「記憶の場」について地域社会での伝承事象を対象に、その記憶形成の過程や「記憶の場」を形成する「歴史的環境」との関わりの中で論じた研究は管見の限りでは見当たらない²。

¹ 「記憶」については、1980年代末以降、戦争被害者の記憶から国民国家論での記憶、さらに脱国民国家論的な歴史意識の中での記憶などとして論じられてきている（『現代社会学事典』弘文堂 2012年12月）。

² 「記憶の場」については、代表的論文集としてピエール・ノラ編（谷川稔監訳）の『記憶の場 フランス国民意識の文化＝社会史』第1巻～第3巻（岩波書店 2002年～2003年）などが出版されているが、「記憶」と「歴史的環境」との関連性について論じた研究は見当たらない。なお、拙稿では「記憶の場」を「集団が認識しその知覚したコトを時代を超えて受け継いでいく歴史的かつ文化的な場（サイト）で地域コミュニティ形成の上で意識面において大きな役割を担う有用な場所」と定義しておく。

そのため、本稿では、地域社会の中で「記憶の場」の「記憶」の源泉となっている「伝説」を取り上げ、その伝説の誕生から成立に至る形成過程を明らかにするとともに、現在、「記憶の場」として存在している場（サイト）が歴史的環境を形成している実態を述べ、その「記憶の場」のイメージ化にあたって「歴史的環境」が果たしている役割を、都市部に位置する東京都三鷹市新川地区の勝淵神社に伝わる「柴田勝家兜埋納伝説」とその境域を事例に論じていくことにした。

2. 柴田勝家埋納伝承地の形成

（1）柴田勝家兜祭祀伝説の誕生

勝淵神社が存在する境域には柴田勝家の兜に関わる伝説があり、勝淵神社の沿革を語る上でその伝説は特記すべき事象である。ここではその伝説が誕生した状況についてみていくことにする。

東京都三鷹市新川4丁目に所在する春清寺に、柴田勝房³という旗本によって作成された「柴田勝家位牌奉安添状」という古文書が現存しているが⁴、この古文書には戦国武将として知られる柴田勝家とその子孫のことや、柴田勝家の兜のことが記されている。

長文であるが全文を読み下し文で掲載すると、以下のようになる。

「遠祖勝家君、権六郎と号す。天文中、織田勘十郎、末盛城に徙る。勝家君、これに従う。清洲之戦、君先ず登り数戦し数克つ。後に去り織田信長公の臣と為る。毎戦最も功す。是に於いて修理亮と号す。天正中、織田氏越前州を伐し之を取る。君の功、諸軍を冠す。廻ち封じ越前州の牧と為る。君、嘗て日根野氏を娶り、男を生ず。勝政君と曰い、天正十二年夏、志津嶽で戦死す。織田氏薨りて、羽柴氏、安土城に拠る也。君、織田氏の為に、之を滅するを謀って克てず。竟に越前州北の荘で自殺す。実に天正十二年四月二十又四日也。語りは具に史中に在りて、其れ敗に当る也。勝政君之児方三歳、従者は秋元某、之を負い、上毛州日根野氏に匿れる。日根野氏、之に田邑を与え、以って之を毓てる。其の冠、成人に為る及び、是れ勝重君と曰う也。

慶長

龍興之冬事

元和元年召して聞く。桜門之軍功多きに従り、因って武蔵州仙川郷を加え賜る。ここに於いて遠

³ 柴田勝房は、『新訂 寛政重修諸家譜』（第六 318頁）によると柴田勝家から数えて10代目の子孫で江戸幕府の幕臣であった。

⁴ この古文書には表題がなく、春清寺では「柴田家先祖書」と名付けている。本稿では内容から「柴田勝家位牌奉安添状」と称することにした。

祖君之兜を以って祠る。今の勝淵之神は是れ也。寛永九年四月二十又五日寿を以って卒す。仙川大源山春清寺に葬る。今、茲に天明五年、洪孫勝房、恭しく遠祖君神位を新たに其の精舎に安んじ奉る。并に其の故を録し、以って副えると云う。

天明乙巳秋

十五世孫修理亮從五位下

柴田源勝房謹誌并書



柴田勝家位牌奉安添状（柴田家先祖書・春清寺所蔵）

漢文体での読み下し文であり、内容をやや理解しがたい箇所や史実と若干異なる記述などもみられるので、以下、すでに知られている史実などを加味しながら意識文を載せておくことにする。

「遠い祖先の勝家君は通称を権六郎と言ひ、天文年間（1532～1555）に織田勘十郎⁵が末盛城⁶に移る時、一緒に従った。清洲城の戦い⁷では勝家君は先陣を務め数度の戦闘すべてに勝利した。のちに織田勘十郎のもとを去って織田信長公の家臣となった。毎回の戦闘では一番の手柄を挙げ、修理亮を名乗ることになる。天正年間（1573～1592）、織田氏は越前国を討伐し領国とした。この時、勝家君の戦功は織田軍の中でも一番抽んでいたため、領地を賜り越前国の領主となった。勝家君はかつて日根野氏の女性を妻に娶り、男子をもうけていた。勝政君と言ひ、天正12年（1584）夏に起こった賤ヶ岳の戦いで戦死している⁸。織田信長公の死後、羽柴（秀吉）氏は安土城を拠点とした。これにより勝家君は織田氏のために謀って羽柴氏を滅ぼそうとしたが勝利することができず、遂に越前国北ノ庄で自害して果てた。実に天正12年4月24日のことであつた⁹。この戦いの詳細は史書の中にあり、それは敗北の合戦であつた。その時、勝政君の遺児は三歳で従者の秋山某はその遺児を背負ひ、上野国の日根野氏のもとに身を隠した。日根野氏は田地を勝政君の遺児に与え養育し、その遺児の第一子が成人となり、勝重君と言つた。慶長年間（1596～1615）に大坂冬の陣があり、その戦闘の状況を元和元年（1615）に勝重君を召して聞くと、大坂城の桜門での戦闘で多くの軍功を挙げており、これによって武蔵国仙川郷を加増された¹⁰。そしてその場所に遠祖である勝家君の兜を以つて祀つた。これが今の勝淵明神である。勝重君は寛永9年（1632）4月25日に長寿で死去し、上仙川村の大源山春清寺に埋葬された。今ここに天明五年孫の勝房が謹み遠祖勝家君の位牌を新たに春清寺に奉安し、ならびにその理由を記録し添状とする。

天明5乙巳年秋

15世の孫修理亮従五位下

柴田源勝房が謹んで誌し、ならびに書す。

」

⁵ 織田信行（信勝）。織田信秀の子供で織田信長の弟。

⁶ 末森城（現・名古屋市千種区）のこと。

⁷ 天文21年（1552）の清洲攻めを指すと思われる。

⁸ 賤ヶ岳の戦いは、織田信長の後継者の地位をめぐる柴田勝家と羽柴秀吉とが対峙した合戦。実際は天正11年4月に行われているので、古文書記述の年代とは異なる。

⁹ 勝家が越前国北ノ庄で自害したのは、天正11年4月24日のため古文書記述の年代とは異なる。

¹⁰ 勝重は慶長4年（1599）に徳川家康に仕え上野国において知行地2千石を下賜されていたが、『新訂寛政重修諸家譜』（第六 316頁）では勝重のことを「（慶長）十九年大坂御陣のときしたがひたてまつり、元和元年大坂再乱のとき平野口にをいて組討し、首二級を得、その身も疵をかうぶる。御帰陣のち其功を賞せられ、武蔵国多摩入間二郡のうちにをいて五百石を加恩せられ、すべて二千五百二十石余を知行す。」と記述している。

この古文書の文末に「天明乙巳秋」、「柴田源勝房謹誌并書」とあり、この古文書が江戸時代半ばの天明5年（1785）秋に旗本柴田勝房によって作文され書かれたものであることがわかる。その内容は織田信長に仕えた柴田勝家を「遠祖」と記し、その事績を紹介し、その孫勝重が大坂の陣の戦功によって、武蔵国仙川郷に知行地を下賜され¹¹、その仙川郷に祖父勝家の兜を祀り、それが今の勝淵神社であることや、さらにその勝重が寛永9年4月25日に亡くなり、上仙川村の春清寺に埋葬された事実など柴田家の略歴を記載している。そして天明五年秋に先祖勝家の位牌を新たに作り春清寺に奉安したので、その理由を記録し位牌に添えるためにこの古文書を作成したことが記されている¹²。

ところで、掲載した天明5年（1785）の「柴田勝家位牌奉安添状」には「聞元和元年召而從櫻門之軍功多因加賜武蔵州仙川郷於是祀以遠祖君之兜今勝淵之神是也」〔読み下し文 ⇒ 元和元年召して聞く。櫻門之軍功多きに従り、因って武蔵州仙川郷を加え賜る。ここに於いて遠祖君之兜を以て祀る。今の勝淵之神は是れ也。〕と書かれている。これによって当時柴田家の当主であった勝房が、勝淵神社と柴田勝家の兜奉納の始原について、柴田家が武蔵国多摩郡上・下仙川村に所領を拝領した江戸時代初期に遡るとの認識を持って「柴田勝家位牌奉安添状」を作成していたことがわかる。同時にその勝房の認識は柴田勝家の位牌を奉安した菩提寺である春清寺の住職など寺関係者を通して、上仙川村でも知られていくような状況が生まれつつあったことが推測できる。

その後、「柴田勝家位牌奉安添状」作成から約10年後の寛政8年（1796）4月24日に至り、柴田家の菩提所となっていた春清寺の墓地に「柴田家碑銘」という石碑が建立されているが、その石碑の碑文には「柴田勝家位牌奉安添状」とほぼ同じ文章がみられ、その碑銘が「柴田勝家位牌奉安添状」を参考に作られていたことがわかる。このように一連の文章を根拠として柴田勝家の兜が勝淵神社の神霊であるという言い伝えが村内に広まっていく契機になっていったことが想像できる。

このように勝淵神社において柴田勝家の兜を祭祀するとの伝説は、記録史料が少なく初見史料である天明5年作成の「柴田勝家位牌奉安添状」の記載や春清寺墓地に建立されている「柴田家碑銘」から江戸時代中期以降に誕生したことが考えられる。

¹¹ この時、新たに知行することになった村は、多摩郡の上仙川村・中仙川村（現・三鷹市新川、および中原）である。

¹² 事実、春清寺にはこの時、勝房が奉納したという位牌が現存している。

(2) 柴田勝家兜埋納伝説の成立

前項 (1) で述べた春清寺墓地の「柴田家碑銘」が寛政8年4月に建立されてから約30年後の文政11年 (1828) に江戸幕府によって編纂された『新編武蔵国風土記稿』には、勝淵明神の項に「柴田勝家ノ兜ヲ納メテ。其靈ヲ祀レリトモイヘリ。」、春清寺の項に「遠祖ノ兜ヲ祀テ祠ヲタツ。今ノ勝淵ノ神是ナリトソ。」¹³という一文もみられ、勝淵神社における柴田勝家の兜祭祀伝説が地域の中に定着している状況を理解することができる。

ところで幕命によって官撰地誌『新編武蔵国風土記稿』の編纂事業に従事していた八王子千人同心組頭の植田孟縉が、その官撰地誌編纂の過程で得た調査成果にもとづき、文政3年 (1820) 9月に執筆した『武蔵名勝図会』(稿本) の中には「勝淵明神 柴田氏此地を領せしより、先祖柴田勝家か靈を祭り、勝家兜を埋しといふ」¹⁴と書かれており、ここに初めて柴田勝家の兜の記述が土中に埋めたとの表現に変わり、伝承が「兜埋納」という形に変容してきていることがわかる。

これによって今日、勝淵神社に伝わる「柴田勝家兜埋納」伝説が、江戸時代後期の1800年代初め頃には成立をみるに至っていたことが理解できる。

(3) 近現代の柴田勝家兜埋納伝説と兜塚再興

江戸時代後期の1800年代初め頃に成立した「柴田勝家兜埋納」伝説が、その後、どのような形で地域に語り伝えられてきたのかについては定かではない。しかし、勝淵神社拝殿に掲げられ、現存する「絵馬」のうち明治20年代から昭和初期まで個人的に祈願した「戦争絵馬」は、すべて合祀神である柴田勝家を信仰対象に奉納されたものと考えられ¹⁵、この時期、柴田勝家兜埋納伝説を意識した信仰が盛んに行われていたことが推測できる。

そのような中であって、戦前期の昭和10年代には「明神様の兜塚には、金の兜が埋めてあるから掘ると目が潰れるそうだ」¹⁶という伝説として子供たちの間に伝えられていたことが確認できる。

しかし、戦後になると国の宗教政策の変更などによって地域住民と勝淵神社との関わりは薄れ、子供たちの間でも「柴田勝家兜埋納」伝説は語り継がれることはなかったようである。また戦前からあった兜塚(塚上にカシのご神木が植えられていた)も放置され、昭和20年(1945)代末～昭和30年代初めのカミナリで塚上のカシは倒木し、そのままの状態が続いていたが、昭和63年(1988)10月に至り氏子会の手によって兜塚が再興され、「柴田勝家兜埋納」伝説は再び年配の氏

¹³ 『新編武蔵国風土記稿』巻之九十四(多摩郡之六)上仙川村の条。

¹⁴ 『武蔵名勝図会』(稿本) 第四 仙川村の条。

¹⁵ 『勝淵神社文化財総合調査報告書』(三鷹市教育委員会 2012年3月) 221頁～222頁。

¹⁶ 井上利明『戦国武将柴田一族と島屋敷』1997年。井上利明氏は大正15年生まれで、勝淵神社の氏子惣代を務めている。

「記憶の場」の形成と「歴史的環境」との関わりについて－勝淵神社の柴田勝家兜埋納伝説を事例に－

子を中心に伝えられてきている¹⁷。



日清戦争図絵馬（明治28年7月）



兜塚と御神木（昭和40年代頃）

¹⁷ 戦後における勝淵神社の状況については、後述する（注19）で実施した勝淵神社の文化財総合調査に際し、2012年3月13日に元氏子惣代であった井上利明氏へのヒアリング調査にもとづき執筆した。



再興された兜塚（2012年 3 月撮影）

3. 歴史的環境の概念と勝淵神社

（1）歴史的環境の捉え方

「記憶の場」として存在している勝淵神社境域を「歴史的環境」という視点から考察していくことにする。

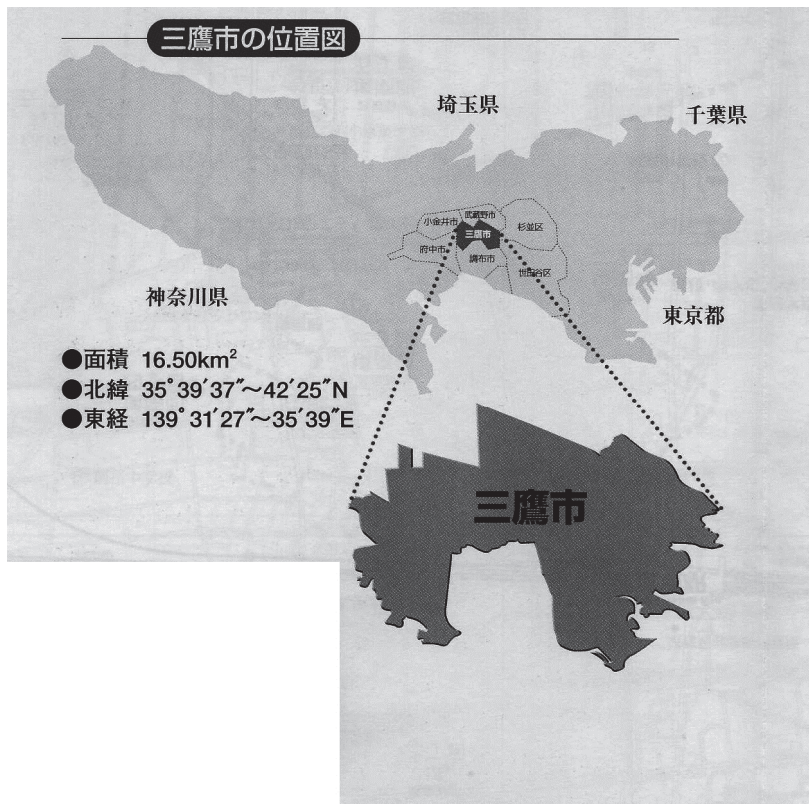
ところで「歴史的環境」という概念については、どのように捉えたらよいのか。その概念については諸説あるが、ここでは、その概念を「町並み・城跡・屋敷跡・社寺境内地に代表されるような場所で、有形の文化遺産や無形の文化遺産（祭礼・神事・風俗慣習・民俗芸能・伝統技術など）が存在することで歴史性を感じ往時を偲ぶことができる一定の場所（空間）」という考え方で捉えた¹⁸。

（2）勝淵神社の歴史的環境

前項で述べたように歴史的環境は「場の歴史性」とそこを「構成するモノ」によって成り立つ概念である。そのためここでは勝淵神社の歴史と、その勝淵神社のある場所に現存しその境域を構成する自然環境、建造物、祭礼行事、絵馬、奉納幟、石造物、構築物などについて述べ、勝淵神社境

¹⁸ この点については、拙編著『歴史的環境の形成と地域づくり』（名著出版 2005年 8 月）を参照のこと。

域の「歴史的環境」としての様相をみていくことにする¹⁹。



①勝淵神社の歴史

勝淵神社の起源については定かではないが、江戸時代には近世村落として成立した上仙川村の鎮守社となっており、明治6年（1873）年には上仙川村の村社に列せられていた。現在は、三鷹市の元・新川本町地区の氏神となっており、この地域（旧・上仙川村）におけるかつての氏神としての性格は存続されている。

神社の名称は隣接する丸池が、かつて「勝ヶ淵」と呼ばれていたところから、この名称がつけられたと考えられる。『新編武蔵国風土記稿』では「勝淵明神社」と記され、境内に現存する延享元年（1744）の石燈籠には銘文が「勝淵大明神」と陰刻され、同じく現存する天保11年（1840）の

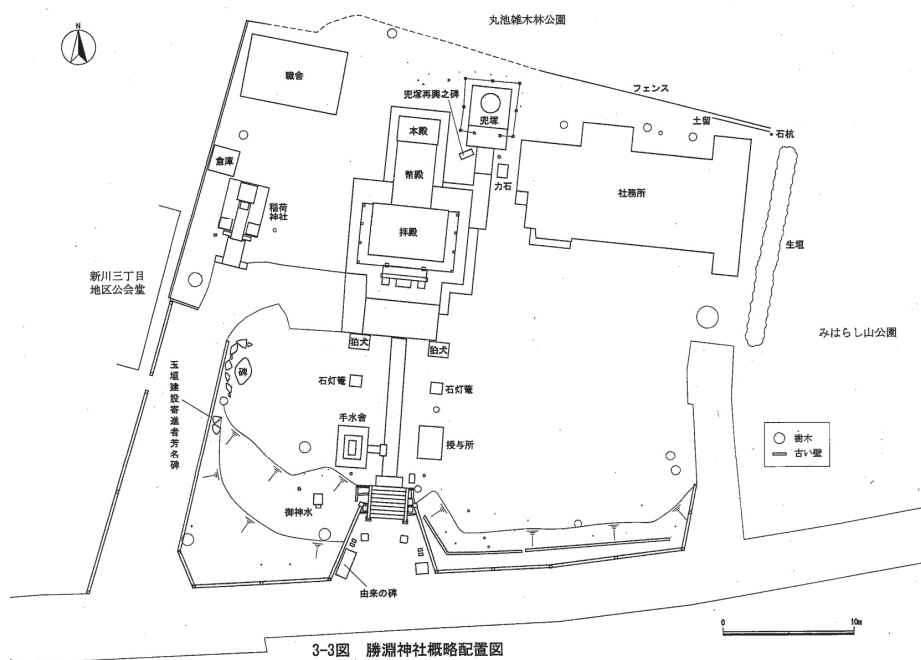
¹⁹ 本項の記述は、筆者が総括担当者になって2011年度に東京都三鷹市新川に所在する勝淵神社の文化財総合調査の折に行なった個別調査の成果と境域内の構築物などの調査成果を加え、新たな視点から分析と考察を行い記述した。詳細は『勝淵神社文化財総合調査報告書』（三鷹市教育委員会 2012年3月）の調査内容を参照のこと。なお、本拙稿に掲載した写真・図版の一部については同書より転載させていただいた。

幟にも「奉献勝淵大明神」と記されており、江戸時代は勝淵明神と称されていたようである。明治26年(1893)の幟には「勝淵神社御祭禮」と書かれており、明治以降、勝淵神社という名称が一般的に使われるようになっていたと考えられる。

『新編武蔵国風土記稿』には「勝淵ノ水神ヲ祭トモ。又ハ柴田勝家ノ兜ヲ納メテ。其霊ヲ祀レリトモイヘリ。」²⁰とあり、祭神の来歴は定かではないが、もともと勝淵の水神が祭られていた場所に柴田勝家の兜を納め祀ったのが勝淵神社の沿革と考えられている。

現在、勝淵神社の由来を特徴づけているのは本殿の東側に柴田勝家の兜を埋納し、その霊を祀ったという伝承であり、境内にはその伝承にもとづく兜塚〔昭和63年(1988)再興〕が現存している。

このような沿革をもつ勝淵神社であるが、その歴史の中で特筆すべきは前述した柴田勝家の兜を納め祀ったという伝説である。従来の歴史学では否定しかねない「伝説」であるが、社会史的側面からみていくと勝淵神社の歴史を特徴づける由緒の一つと言える²¹。



3-3図 勝淵神社概略配置図

²⁰ 『新編武蔵国風土記稿』巻之九十四(多摩郡之六)上仙川村の条。

²¹ この勝淵神社と柴田勝家の兜に関わる伝説については、前節で詳述した通りである。



勝淵神社境域

②自然環境

社叢に生育している樹木は、イチヨウ1本、イヌシデ7本、シラカシ6本、エノキ1本、ケヤキ1本、ソメイヨシノ1本、イヌツゲ2本、タカオカエデ1本、ヒサカキ3本、サカキ2本計25本の樹種である。社叢の相観はシラカシとイヌシデによって構成されているが、それらの樹種は、人物を祀る神社の社叢に共通し、武蔵野台地の地形に共通する土地的要因の強い植生である。特に参道両側の2本のシラカシと稲荷神社前のシラカシの林冠によって社叢の景観は印象づけられるが、イヌシデの大木の存在は、武蔵野台地の地形的特徴を背景とした地域の特性を反映している。社叢を主に構成するシラカシ6本（幹周り2.53m～0.62m）とイヌシデ7本（幹周り2.39m～1.65m）の樹齢は、推定で4本が120年位、その他は90年位と考えられている。

③建造物

本殿を除く現存する社殿の平面部分は、明治22年（1889）3月9日に上棟されたものと考えられる。現存する本殿は平成11年（1999）10月吉日の工事によって増築されたもので、以前本殿であった部分は、新たに幣殿として改築が行われている。拝殿は明治22年に完成した建物で、平面規模は間口（桁行）三間（実寸法5,460mm）、奥行き（梁間）二間（実寸法3,660mm）の大きさで、

南面した平入りの形状である点については、建設時と変化していないと推測できる。また拝殿の屋根は入母屋造り、向拝付の形状で拝殿の建設時と変化はないものと考えられる。拝殿・幣殿ともに屋根葺き材は建設当時の茅葺きから銅板葺き・瓦葺きに変更となり、床下の改修工事も行われているが、拝殿内部の床の木製板張り、内壁の木製横板張り、天井の竿縁天井板張りは建設時の仕上げ材であると推定される。



勝淵神社社殿

④祭礼行事

勝淵神社で、現在、行われている主要な祭礼行事は、元旦祭（1月1日）、塞の神（1月15日）、月祭（1月19日）、大祓祭（6月下旬）、例大祭（10月第二日曜日）、七五三祭（11月吉日）、月祭（11月19日）、大祓祭（12月下旬）などである。

ところで、勝淵神社の氏子は、現在、約220戸で「勝淵神社氏子会」を組織し、氏子会は四つの組に分かれおり、それぞれの組から総代1名が選出され、4名の総代の中から1名が氏子会会長となっている。4名の総代が勝淵神社の祭祀の中心となり、特に10月の例大祭は青年部、婦人部、町会演芸部などが執行に関わっている。



例大祭（2012年10月13日撮影）

勝淵神社の祭礼行事のうち例大祭は10月第1週の土日に行われ、神事、演芸大会、太鼓巡行、万燈神輿巡行が主体である。太鼓巡行が古くからの祭礼の中心で、氏子地区（旧・上仙川村）のほぼ全域を巡行する。万燈神輿は、約30年前（1980年代）、祭礼のにぎやかさを演出するための出し物として始まったものと伝えられ、神を載せないで巡行しているので、宮司・神主は一切関わっていない。神を載せて巡行する神輿を欠いているのは特徴として指摘できる。

⑤絵馬

絵馬群は総点数25点、うち絵馬11点、文字額14点で、年代は明治24年（1891）～昭和44年（1969）のものである。戦争・兵役に関わる戦争絵馬6点も含め「武」に関するものが多く、当社

の信仰対象が武人的性格をもつ柴田勝家にあったことを知ることができる。新川地域の信仰の状況、とりわけ戦争・兵役に関わる心意を伝えている。



桜井の別れ図絵馬（明治29年10月）

⑥奉納幟

天保11年（1840）9月と明治26年（1893）8月の年号が入った各一对計4点の奉納幟である。天保11年9月の幟の寸法は全長約9m、布幅は0.73m、乳の部分を加えた幅は0.90mと、江戸時代の幟としてはかなり大きい。素材は木綿で、幟の最上部には注連縄と紙垂（しで）の文様が描かれ、その下に「奉獻勝淵大明神」の神号が染められている。神号の両脇には、右側に「天保十一庚子歳」、左側に「九月吉祥日」と奉納年月が染められ、神号の下には「當所惣氏子中」と奉納者が記されている。

一方、明治26年8月の幟は、全長9.2m、布幅は0.83m、乳の部分を加えた幅は1mと、江戸期（天保11年9月）の幟に比べて一回り大きく、布地も素材は同じ木綿だが糸が太く厚手でしっかりしている。文字の書き方が江戸期のものと大きな違いがあり、こちらの幟は白地の布に墨で直接に筆書きしている。右上部と左下部に朱色の落款が押され、真ん中に躍動感の溢れた筆跡で「勝淵神社御祭禮」の神号が書かれている。神号の下には、右から「明治二十六年八月吉日」の年紀、中央に「當所氏子中」と奉納者、左に「野恭敬書」と揮毫者の名前が墨書され、二種類の落款が朱の印

泥で押されている。

奉納年月、奉納者が明記されており、時代的、地域的特色を示す歴史資料である。



奉納幟

⑦石造物

境内正面の石造鳥居をくぐった石段の左右に2基の石塔がある。

2基の石塔には「勝淵大明神御寶前石燈籠」「武州多摩郡上仙川村氏子中」「延享元年甲子九月吉日」と銘文が陰刻されており、この彫られた文字から、石塔が延享元年（1744）9月上仙川村の氏

子によって「勝淵明神」の前に奉納された「石燈籠」の竿石であったことがわかる。台石、笠石は後補である。2基のうち1基は紀年銘当初制作のものと推定できるが、もう1基は石質や文字の彫り込みの状態から、当初制作の竿石に模して後年制作されたものと考えられる。



勝淵大明神御寶前石燈籠

⑧構築物

境域内には、石鳥居（昭和11年4月建立）、石造手水盤（昭和11年10月建立）、石灯籠（昭和11年10月建立）、石造狛犬（昭和11年10月建立）、石造稲荷社と鳥居（昭和48年9月建立）、木造手水舎（昭和56年4月建立）、兜塚（昭和63年10月再興）、兜塚再興之碑（平成13年10月建立）、力石台座（平成13年10月建立）、勝淵神社標石（平成13年10月建立）、玉垣建設寄進者芳名碑（平成13年10月建立）、勝淵神社由来碑（平成20年10月建立）など戦前から近年に至る期間に建設された構築物が現存しており、それらの「モノ」を通して「場」としての「歴史性」を確認することができる。

（３）歴史的環境としての文化財的価値

上記（２）の①～⑧の個別文化財などの検討から、勝淵神社境域が歴史と伝承、自然環境、建造物、祭礼行事、民俗資料、歴史資料などが集中して伝存し、その場所が祭祀信仰に関わる遺跡であり、「モノ」や「記憶」を通して「場」としての「歴史性」を感じることができ、「歴史的環境」と

して歴史の正しい理解のために欠くことのできない場所であることがわかる。そのような視点からみていくと当該地が「歴史的環境」として地域にとって文化財的な価値を有する場として現存し立地している現状が理解できる²²。

4. おわりに

以上、都市部に位置する東京都三鷹市新川地区の勝淵神社を事例に、現存する史料の分析から、柴田勝家の兜祭祀や兜埋納の伝説が江戸時代中期以降に誕生し今日まで伝承されてきている状況を考察した。一方、勝淵神社とその境域の文化財総合調査による調査成果の検討から、当該神社の境域が歴史と伝承、自然環境、建造物、祭礼行事、民俗資料、歴史資料などが集中し伝存してきており、その場所が歴史的環境として地域にとって文化財的な価値を有する場として存在している状況を確認することができた。

ところで、筆者は拙稿執筆にあたって「記憶の場」を「集団が認識しその知覚したコトを時代を超えて受け継いでいく歴史的かつ文化的な場（サイト）で地域コミュニティ形成の上で意識面において大きな役割を担う有用な場所」と定義した。この定義からすると「記憶の場」は人びとの「認識」や「知覚」をベースにした「記憶の場」と捉えることができる。記憶に関わる意識は関連するモノの存在によって増幅されイメージ化されていくものであり、今回、事例として取り上げた「記憶の場」としての勝淵神社の「柴田勝家兜埋納伝承地」の場合も、その場を構成する自然環境（社叢）、建造物（社殿）、祭礼行事、絵馬、奉納幟、石造物、構築物（兜塚等）などモノの存在によって神社の境域という神秘性や宗教性を醸し出し「記憶の場」をイメージ化して伝存してきていることが理解できる。

そのため、「記憶の場」のイメージは、「場の歴史性」とそこを「構成するモノ」によって成り立つ「歴史的環境」の中で増幅されていくものであり、歴史的環境の存在は「記憶の場」のイメージ化に大きな役割を果たしていることが考えられる。

以上、本研究を通して「記憶の場」の形成過程の実態と、歴史性を感じることができモノが存在する「歴史的環境」との関わりを論じてきたが、事例に挙げた勝淵神社の「柴田勝家兜埋納」伝説が、歴史性が感じられる場での伝承によって「記憶の場」が形成され今日に至っている状況を明ら

²² 勝淵神社境域は、三鷹市教育委員会が2011年度に実施した「勝淵神社文化財総合調査」の成果をうけて、「勝淵神社及びその境域は、柴田勝家の兜を埋めたという著名な伝承地として、また江戸時代以降旧上仙川村の鎮守として、地域の厚い信仰を集め、祭礼の場としても位置づけられた長い歴史を有している。市域に稀有な伝承地として重要である。」との理由によって、2012年6月6日付けで「柴田勝家兜埋納伝承地」として三鷹市の文化財（史跡）に登録された。

かにすることができた。これによって「記憶の場」の形成・継承にあたっては「歴史的環境」の存在がそのイメージ化に大きな役割を果たしていることを指摘し、本稿のまとめとする。